令和2年度　小松市立高等学校　学校評価（中間評価）

重点事項		具体的取組	主担当	現　状	評価の観点	達成度判断基準	取り組みの現状と今後の方向	中間評価
1	「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善に努め、確かな学力の育成を図り、進路実現につなげる。その際、ICTやアクティブ・ラーニングの手法を活用する。	1 アクティブラーニングを実践し、生徒の自己肯定感を高め、課題発見力と解決力の育成を目指す「主体的・対話的で深い学びの過程」を実践する。	教務課	「アクティブラーニング」を実践している教職員は6割に達していない。学校全体の取り組みとして、生徒の授業への主体的参加を念頭にした、アクティブラーニングの活性化を推進しなければならない。	【努力指標】 ・「アクティブラーニング」を実践して、生徒が主体的に参加する授業を行い、生徒の思考力・判断力・表現力を高めている。 ・よくあてはまる　10回以上／月 あてはまる　4～9回／月 あまりあてはまらない　1～3回／月 全くあてはまらない　0回／月	「アクティブラーニング」を実践して、生徒の自己肯定感を高めるだけでなく、課題発見力と解決力を目指す「主体的・対話的で深い学びの過程」を実践している（よくあてはまる　あてはまる）と思う教職員の割合が A　70%以上 B　50%以上 C　30%以上 D　30%未満	「主体的・対話的で深い学び」を目指して授業内容・形態を工夫している教職員の割合は87．5%である。また、生徒の授業への主体的参加や思考力・判断力・表現力を育成し、生徒の自己肯定感を高めるだけでなく、課題発見力と解決力を高めようと、月に4回以上のアクティブラーニング授業を実践している教職員の割合は72．5%に達している。さらに、生徒の授業への主体的参加を念頭にした、アクティブラーニングの活性化を推進するため、先進校の事例紹介や研究授業を実施していく必要がある。	A　（72.5%）
		2 ICT機器の積極的な利活用によって、効率的かつ効果的な工夫された授業を展開し、生徒の十分な学習内容の定着を図る。	教務課	ICT機器の増設に伴い、「ICTの効果的活用」に取り組む教職員は増加しているが、授業実践における活用場面の回数は微増にとどまっている。	【努力指標】 ・「ICT機器の利活用」の状況を調査し、その活性化に努める ・積極的に利活用 よくあてはまる　40回以上／月 あてはまる　20～39回／月 あまりあてはまらない　1～19回／月 全くあてはまらない　0回／月	ICT機器を積極的に利活用して、効率的かつ効果的な工夫された授業を行っている（よくあてはまる、あてはまる）教職員の割合が、 A　70%以上 B　50%以上 C　30%以上 D　30%未満	ICT機器を積極的に利活用して、効率的かつ効果的な工夫された授業を行っている教職員の割合は65．0%にまで達した。また、ICT機器の利活用をしていない教職員の割合は2．5%にまで激減した。さらに、ICT機器を利活用した効率的な授業展開を進めるため、各教科の特性を踏まえて、ICT機器の効果的な活用方法について情報を共有する中で、さらなる活用促進を図っていく必要がある。	B　（65.0%）
		3 総合的な探究の時間における個人発表やグループ発表をより充実したものへと発展させるとともに、グループワークでの情報交換や意見交換の場面でも表現力や発進力を指導する必要がある。	教務課	総合的な探究の時間における個人発表やグループ発表をより充実したものへと発展させるとともに、グループワークでの情報交換や意見交換の場面でも表現力や発進力を指導する必要がある。	【満足度指標】 ・総合的な探究の時間において、生徒の主体的な取り組みを通して、生徒の表現力や情報発信力が成長している。	総合的な探究の時間における生徒の主体的な取り組みを通して、生徒の表現力や情報発信力が成長したと思う生徒・教職員の割合が A　70%以上 B　60%以上 C　50%以上 D　50%未満	生徒の主体的な取り組みや表現力・情報発信力の育成に努力している教職員は77．5%で、前年度最終評価（80．5%）より3ポイント減少した。また、授業や総合の時間を通して話したり発表したりする力がついてきたと感じている生徒は76．4%で、前年度最終評価（73．6%）より2．8ポイント増加した。課題研究生徒発表会の準備でも発表でも充実感を持つことができたと考えられる。今後の探究活動においても発表場面を設定して、継続的に指導していきたい。	A　（76.4%）
		4 Classi活用により、日々の学習時間や活動記録を蓄積したり、振り返ってまとめ直したりすることを通して、「学びに向かう力」を涵養する。	教務課	これまでも家庭学習時間や様々な活動履歴を記録するよう指導してきたが、教員からの働きかけの量や偏りに課題がある。ポートフォリオ機能の課題配信を計画的に行い、活動記録を増やすことで、面談等での効果的な活用を期待したい。	【満足度指標】 Classiの学習記録及びポートフォリオ機能の活用が、生徒の「学びに向かう力」の指導に役立っている。	Classiの学習記録やポートフォリオ機能を活用し、生徒の「学びに向かう力」の指導に役立てている（よくあてはまる、あてはまる）教員の割合が、 A　70%以上 B　50%以上 C　30%以上 D　30%未満	Classiの学習記録やポートフォリオ機能を活用し、生徒の「学びに向かう力」の指導に役立てていると思う教職員の割合は60%で、前年度最終評価（48．7%）より11．3ポイント増加した。また、Classiの学習時間入力を学習活動の向上に役立てていると思う生徒の割合は50．1%（前年度最終評価46．0%）で、Classiのポートフォリオの作成を通し学校生活の振り返りを行っている生徒の割合は32．4%（前年度最終評価37．6%）である。活用場面の設定により良化してきているので、今後も改善策を押し広げていく。	B　（60.0%）
		5 大学入学共通テストに対応できるように、1，2年生のうちに生徒の大学進学意識を向上させ、さらには学力の定着と向上を目指す。特に成績下位～中間層へ様々な角度からの刺激を行い、意識改革を行う。	進路指導課	1年生では自分の進路希望をかなえるための正しい文理選択を行い、学力向上に向けて継続的に努力することを身に付けさせる。2年生では様々な進路希望、学力層に応じた学習指導によって、進路実現を確実に達成するための学力の定着、向上が求められている。	【成果指標】 学年終了時までに組織的、系統的な指導によって学力が伸び、大学受験の基礎が築かれている。	国語・数学・英語の各偏差値が50以上の生徒数が 国語：A　50人以上　B　45人以上 C　40人以上　D　40人未満 数学：A　40人以上　B　30人以上 C　25人以上　D　25人未満 英語：A　40人以上　B　30人以上 C　25人以上　D　25人未満	1，2年生は7月に進研記述模試を受験した。1年生では9月8日に類型選択科目説明会を開き、文理選択に係る説明と注意を行った。2年生は授業を今年度から始まる大学共通テストに対応した形態にシフトしている。また、最新の進路情報を　アップトゥデイトで配信している。いずれの学年も英国数の3教科を中心にこれまで以上に記述力や表現力の向上が求められているため、授業や補習だけでなく個別指導などを通じて学力アップを図っていきたい。	1年　国語　D 数学　D 英語　D 2年　国語　B 数学　D 英語　C
		6 3年生が進路実現に向けて主体的・継続的に行動し、個別指導や補習等を通して各自の第1希望合格を達成させる。	進路指導課	ここ数年国公立大学希望者や有名私大志望者が増加傾向にある。特に国公立大では全国を視野に入れてチャレンジする姿勢を育てる必要がある。一方で、入試の難化傾向が見られる。	【成果指標】 個々の能力に応じた個別指導の充実や補習（放課後・夏季・冬季）・土曜ゼミ等を通して学力を伸ばし、全国を視野に入れた国公立大学の現役合格者数を増やす。	国公立大学現役合格者数が A　30人以上 B　25人以上 C　15人以上 D　15人未満	3年生では2学期が始まり、総合選抜や学校推薦選抜に挑戦するか否かを決断する時期に差し掛かってきた。推薦希望者には志望理由書の作成の指導を行っている。また、補習や個別指導、模擬試験を通じて学習習慣を質、量ともに上げていく指導を心がけていきたい。また、国公立大学の志望者が最後まであきらめずに努力を続けていけるように、面談や個別指導を充実させたい。	年度末に評価
2	グローバル社会に対応できる自己発信力を高める。特に英語によるコミュニケーション能力を育成し、英語力向上を図る。	1 英語学習の聞くこと、読むこと、話すこと［やり取り］［発表］、書くことの五つの領域を伸ばし、2年次における実用英語技能検定や12月のGTEC受験を通じて、スコアアップを目指す。	教務課 進路指導課 英語科	大学入学共通テストにおける英語のリスニングは今年度から配点が大幅に変更され、得点に占める割合が増えた。これまで以上に聞くこと、話すことの領域を向上させ、全体として五つの領域を伸ばしたい。生徒のスキルアップを行うため、授業改善をしていく必要がある。	【成果指標】 実用英語技能検定およびGTECを通じて、卒業までにCEFR A2レベルに到達することを目標にして、五つの領域のスキルアップを目指す。	卒業までにCEFR A2レベル以上の生徒が A　80名以上 B　70～80名 C　60～70名 D　60名未満	大学共通テストにおいて英語リスニングの力は大学入試の合否に係る重要な要素となっている。このため、英語科や進路指導課が中心となって資格取得への意識づけを高めていかなければならない。今後は、2年生は10月英検と12月GTEC、1年生は12月GTECに向けスキルアップを目指していきたい。	英検およびGTECの結果が出次第評価
		2 Online Speaking Training（OST）を活用して、英語力「聞く」「話す」の技能向上を目指し、GTECのスコアアップや英語検定の合格を目指す。	教務課 英語科	GTECや英検受験について十分な指導があると思う生徒の割合は7割程度であるが、今年の状況から7月のGTEC試験は中止とした。	【満足度指標】 「聞く」「話す」の技能向上目指し、OSTを活用して、GTECや英検受験について十分な指導をしている	GTECや英検受験について、OSTを活用して十分な指導があると思う生徒の割合が A　70%以上 B　65%以上 C　60%以上 D　60%未満	10月の英語検定、12月のGTECの試験に向けて、計画的な指導に取り組んでいきたい。OSTでは、聞くこと話すことの技能を高めることができるので、OSTを活用しながら生徒の英語の技能を高められるよう日頃の指導をしていきたい。	A　（72.7%）
3	生徒一人ひとりの品格を高め、規範意識と社会性を身に付けさせるとともに、急速に変化する多様な社会に	1 品位ある服装、爽やかな挨拶、時間厳守など、進路実現に直結する生活姿勢の改善に生徒自らが意識して取り組むよう指導する。遅刻をなくすために、年間を通し職員による登校指導や生徒の個別指導を行う。	生徒指導課	制服を正しく着こなす生徒は増えてきており、遅刻者の件数も減少しているが、まだ十分ではない。	【成果指標】 1日の生徒の遅刻者の平均人数から判断する。	1日の生徒の遅刻者の平均人数が A　1人以下　B　3人以下 C　5人以下　D　6人以上	時間を厳守し8時25分からの朝学習で落ち着いて学習できるように、8時20分までに登校するように指導した。1日平均の遅刻数は2.9人。通院等を除くと1.1人であった。減少理由は20分登校とともにコロナウイルスの影響も考えられる。後期は天候不良も予想される。より一層、余裕を持って登校するよう指導したい。	B　（1.1名） 1年0．2名 2年0．3名 3年0．6名

	対応できる主体性を育む。	2		生徒指導課		【満足度指標】 制服の着こなしに対する、教職員評価から判断する。	「生徒は制服を正しく着ている」という項目に対し、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた教職員の割合が A　80%以上 B　70%以上 C　50%以上 D　50%未満	7月の学校評価教職員アンケートでは、「あてはまる」と答えた教職員は72．5%であった。教員側の共通指導と生徒の意識改革を図り、今後も厳しく指導をして行きたい。	B （72.5%）
4	芸術コース及び部による地域貢献活動を積極的に行い、小松市民に愛される学校をめざす。	1	部活動をさらに活性化し、校内外の発表やボランティア活動等に積極的に取り組む。	生徒指導課	各部の活動が活発になってきており、校内外での発表やボランティア活動等の機会が増加している。	【努力指標】 部の発表や活動を通して生徒の発信力が養われる。	部の発表やボランティア活動等の機会が A　35回以上 B　30回以上 C　20回以上 D　20回未満	現在、新型コロナウイルス感染拡大のため、ボランティア活動等は行えない状態である。今後感染が終息した後、活動を再開していきたいと考えている。	年度末に評価
		2	芸術コース入学希望者の確保のために、本校専攻生による出身中学校訪問･部活指導等、生徒主体の情宣活動を行うとともに、教員による体験入学希望者確保のため中学校訪問を行う。	芸術コース	地域貢献活動は近年、多くの依頼を受け、好評をいただいている。生徒募集に繋げるためには保護者への進路保証が鍵となっているように感じる。	【努力指標】 芸術コースからの発信力の高まりにより、中学校の芸術コースに対する興味関心が向上している。	11月の芸術コース体験入学参加者数が A　60名以上 B　59～50名 C　49～40名 D　39名以下	現在、新型コロナ感染拡大のため、今年度地域行事の参加や対外的な行事がストップしている状態である。9月末開催予定の吹奏楽部定期演奏会の案内にあわせて芸術コース体験入学案内ポスターを配布予定である。今後も出来る範囲で情宣活動を行っていきたい。	年度末に評価
5	教職員の協働する力を高め、校務の効率化を図り、心身ともに健康な職場作りを行う。	1	超過勤務の時間を減らし、職員の心身の健康を守り、よりよい教育活動を行う基礎を確立する。そのために、毎月「定時退庁日」や「ノー残業デー」を設置し、職員に周知して実行する。	教頭	学習指導や部活動指導などによって勤務時間を超えて業務を遂行する職員が多く、時としてそれが過重となり、心身の疲労感や体調不良につながる場合がある。	【努力指標】 「定時退庁日」「ノー残業デー」をはじめ、日頃から業務の効率化を意識し、勤務時間内で業務が終了するよう努力する。	超過勤務80時間を越える職員の割合が、 A　6%未満 B　6～8% C　8～10% D　10%以上	第Ⅰ期（4～6月）の統計では超過勤務80時間を越える教職員の数は以下の通り。 4月：なし　　5月：1名　　6月：2名　　計3名（6．9%） いずれも修学旅行や宿泊を伴う部活動の引率業務が原因となっている。通常の業務での超過勤務対象者はいなかった。今後も業務の効率化を図っていきたい。	A （6.9%）